

展景

季刊

No.70



2013年6月16日発行

通巻第70号 オンライン版第10号

無二の会

muninokai.com

目次

缶叩くおと〈短歌〉	池田桂一	3
水のおと〈短歌〉	小野澤繁雄	4
蛸殻町〈短歌〉	河村郁子	5
ひな市〈短歌〉	布宮慈子	6
花と同窓会〈短歌〉	丸山弘子	7
声なき声に〈短歌〉	結城 文	8
海底の石〈俳句〉	新野祐子	9
近江気まぐれ文学抄 39			
楠見朋彦『塚本邦雄の青春』	新関伸也	10
松濤	松井淑子	12
〈那須通信15〉ことば	加藤文字	13
対詠「ごぎげんいかが」 PART 46	丸山／布宮／小野澤	15
前号作品短評 A		16
前号作品短評 B		17
エッセイ教室「清紫会」の作品より			
私の三月三日	市川茂子	18
私のふるさと	大石久美	19
義兄の死	丸山弘子	20
「清紫会」だより		21
無二の会短信		22
編集後記		24

缶叩くおと

池田桂一

傾きしトタンの屋根に生る雑草そのままにして二年経たり

震災の跡など嘘のごとくにてつね往く道は家並整う

冬の間の雀の餌付けに缶叩く習いとなりて十五年経つ

餌付けなる缶叩く音のこだまして雀から鯉に餌替りせり

足音に寄りくる鯉に動きあり缶叩きつつ浮餌を撒きぬ

空缶を叩けば池面に口を出し小波立てて鯉らの泳ぐ

水張田の増えきて夜毎に蛙らの声は天より降るごとく聴く

夏の陽に反射の強き石畳 日除けにゴーヤを植えんとおもう

粗相する子猫に向かいて徐に捨ててしまふよと繰り返す言

明け近く郭公の声の徹りきて寝覚めの床を早く畳みぬ

水のおと

小野澤繁雄

透明なゴミの袋は山吹の花枝満ちて運ばれてゆく

世界には拾いきれざる石あるに拾いはじめて止まぬおさなご

何事か重さあるものの音はしてハシブトが駐車場屋根におりたつ

右の手に軽くからめてつかわれしボールペンにも若さが出でて

大名行列のようにして通学班は交差点まで守られきたる

もどりきて沼のほとりに噴水は水のおとにて水面打ち打つ

背丈ほどにのびたる庭の草の間にリトルピープルいつよりすめる

バスを待つ間のことか幼稚園児が金網ごしに鯉をおどして

ときおりを木を選んでか風渡る山のみちハナミズキが咲いて

牡丹には盛りをすぎしものもあり子ときてはフラダンス見ずにもどりぬ

蛎殻町

河村郁子

同期会へ二〇一三・四月十日▽中寿迎える会と副えられる

卒業ゆ六十一回続き来て四十三名相集いたり

それぞれの八十年を生きて来し互いの皺にかがやき満つる

戦争に疎開に終戦　ララ物資を分かち合いたる中学時代

会場は我が成長の地・蛎殻町幼ともだち三人と会いぬ^{みたり}

約束して友と通いし「あやめ湯」は跡形もなし知る人もなし

路地裏に井戸のポンプ立ち水も出る友と同時に「防空演習」

わたくしの青春とどめる街なのに卯月の風は素っけなく吹く

老いたれど同期の輩との語らひは高校時代にありしままなり

来年の幹事を決めて再会を堅く約して二次会へ継ぐ

ひな市

布宮慈子^{やすこ}

その日よりスカートはけるうれしさよ ひな市の立つ春待ちをりき

ひな市は月遅れなり雪国に春の光のやうやく射して

享保びな蔵の奥より出されて細き目をもて今年を見つむ

鯨田螺野老^{かどたにしどころ}あさつき慈姑卵^{くわみ}、供へられをり雛^{ひひな}の膳に

春の菜^{さい}つくらむとしてひな市に播粉^{すりこぎ}木買ひぬごつごつした手

ひな市を歩けば菓子^この袋もて子ども^このわたしが横切りてゆく

こころかろく東京へと向かひたるわれの重心みちのくにあり

いつ来てもベンチの真中に仕切りあり上野公園棘^{とげ}のやうなる

雨の日の上野の森に下り立ちて五百年前のラファエロに会ふ

目に残るひなの紅、愛をしめす聖母の衣服ラファエロの赤

花と同窓会

丸山弘子

庭もなき町なかの小さき寺なるも借景はくれん白木蓮の清しさに遇ふ

スモーキングエリアの傍の花壇にて十色といろに余るルピナスの花

さくらまつりの提灯吊すも慌し満開宣言そこまで来てゐて

さくらまつりは二週間先はやばやと彼岸なかび中日の満開宣言

葉ざくらに提灯もまたよく映ゆる駅より北へ二キロつづきぬ

この秋に米寿むかへるといふ佐藤さん団地のコーラス部に十四年とぞ

「おとうさん」と呼べば応ふる岡林さん半世紀前の渾名いまも生きてる

まさぐりて取り出したる小さき物 九鬼さん掌の中の補聴器を見す

二世帯住宅に建替へ住むとふ池之端に中川さん小唄の再開も告ぐ

計算が合はずに涙したる吾を擲揄やゆせし田中さんこの中に居る

声なき声に

結城 文

太陽のまはりを地球は巡るのみわれらはどこにも辿りつけない
幾筋もの傷のやうなり地図上に入り組み引かれし境界線は
人群るる祭りの喧噪われの名を呼ぶものなき無縁の広場
石畳の石てらてらとわれもまたここ過ぎゆきしものらのひとり
交差点行き交ふ人の数ほどの願望渦巻く声なき声に
地下鉄の階黙々とのぼりゆく吹きおろしくるは文明といふ風
心地よさ求めて暮らす 人工の光のなかに言葉交はして
橙^{たうわう}黄のまばゆきタワーと尖塔のある教会の黒き大屋根
地上より離れつつ天を指す塔の投網のごとく光しぼりて
光もてここにたちぬし塔のことエピソードとして語る日あらむ

海底の石

新野祐子
にいの

てのひらは木の香のしとね西行忌

万愚節鳥のミルクといふお菓子
ばんぐせつ

春囊井戸から豹を救ひしと
はるみぞれ

朝毎に歌声殖ゆる四月かな

春愁が音立てて皿洗ひだす

北窓を開けて全身小説家

樵林に海底の石 風光る

夕蛙耳は胎児のかたちして

風を読む旅芸人をつばめの死

種を蒔くジャックが登る豆の木の

楠見朋彦 『塚本邦雄の青春』

新関伸也にいげき

革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化していくピアノ

(『水葬物語』一九五一年)

この昭和二十六年に詠まれた一首は、五七五七七の句ごとに読むと「かくめいか／さくしかにより／かかられて／すこしづつえきか／していくピアノ」であるが、意味的には「さくしかに／よりかかられて／すこしづつ／えきかしていく」という区切りである。いわゆる「よりかかられて」が二つの句に分断されている一方で一つの言葉が二つの句にまたがっている。いわゆる「語割れ」と「句またがり」と呼ばれる新しい短歌技法を武器に塚本邦雄は『水葬物語』でデビューする。

以後も塚本は、伝統的なアララギ派の写実を乗り越えた短歌、勢いをなくした短歌を現代に蘇らせるために心血を注ぎ、幻想的な比喻とイメージに批評性を加味した手法で歌を詠んだ歌人である。岡井隆、寺山修司らとともにニューウェーブ短歌の旗手となり、戦後の日本において「短歌に何ができるか」を問い続け、昭和三十年代以降の前衛短歌に多大な影響を与えた。その塚本は、生涯二十四冊の歌集を出版したが、短歌だけではなく小説、評論、句集など、多彩にかつ精力的に執筆活動を続けて世に問うた人物である。

塚本の前衛短歌の拠り所は、フランス文学やキリスト教の『聖書』、日本の古典文学であった。初期にラディゲやランボー、ブレイクやアポリネールに傾倒し、『聖書』を読み続けた西洋的な教養と広範な日本古典文学の教養を土台としている。また、表現には終生一貫して旧漢字、旧仮名遣いにこだわり、戦後の中途半端な漢字の変更を「美しくない」として拒み続けた。

ところが、第一歌集『水葬物語』を出版するまでの二十年余りの経歴は事実と虚構が入り交じり、生前塚本自身も詳細に語らなかつたため、謎めいていた。この謎に挑んだのが近畿大学教授時代の教え子である小説家の楠見朋彦である。本書で楠見は、塚本の著述や資料から断片を拾い集め、かつ実地に赴きながら年譜の余白を埋めていく。そのため彼は筆者の想像が加味された「評伝のたぐいではない」と述べている。その文体は「京都新聞滋賀県版」への連載であったため、読みやすいものとなっている。

さて、塚本邦雄は、一九二〇年に滋賀県神崎郡南五個荘村川並(現、東近江市五個荘)、いわゆる近江商人の中でも五個荘商人を輩出した地に姉二人、兄一人の四人兄弟の末子として生まれる。塚本家も商家であったが、四歳で父が他界し、母の手一つで育てられる。

末子ということもあり、短歌を始めていた兄春男や古典に親しんでいた姉らの影響で漢字や地名に興味を示したという。このような少年時代を過ごしながら、肉親や叔父の影響によって文学的な素地がつくられている。南五個荘尋常高等小学校卒業後、神崎商業学校（現、八日市高校）に進学。卒業後、商社「又一（株）」に就職するが、二十歳で広島呉市の広海軍工廠に徴用され、そこで終戦を迎える。広島短歌結社「木槿」に入会し、竹島慶子と出会い一九四八年に結婚する。やがて松江へ転勤、長男青史誕生。松江で杉原一司と一九四九年『メトード』を創刊するが、杉原が二十四歳で夭折する。この杉原への鎮魂歌となる第一歌集『水葬物語』を三十一歳で刊行するのだが、中井英夫によって意図的に二十代と紹介され、本人もそれを否定することなく過ぎていく。いや否定できなかつたのであろう。戦後の短歌を改革するために塚本は、二十代という若さを売りにする必要があつたのかもしれない。また、塚本の学歴に関して神崎商業学校ではなく、彦根高等商業学校（滋賀大学経済学部）卒業と称していた時期もある。このような年齢や学歴の詐称が虚構の所以となる。それ以後、終の棲家となる大阪へ転勤するが、三十三歳のとき結核に感染し自宅療養。以後も経理担当の会社員として勤めながら、第一歌集『裝飾樂句』、第三歌集『日本人靈歌』の他、小説や評論など意欲的に作品を発表し、一九八五年、短歌結社「玲瓏」を設立。近畿大学教授などを経て、二〇〇五年、八十四歳で他界する。

以上が経歴の概略だが、楠見によれば塚本の故郷は、二十歳まで過ごした出生の地、近江五個荘と「第二の故郷」出雲、そして「文学的故郷」呉の三つがあるという。

では第一の故郷である近江は、どのように歌われたのだろうか。塚本にとつての五個荘の風景は、母と過ごした十代までの思い出と重なる。その一方で自らの血に流れる商人の金銭感覚や蓄財生活を嫌った塚本は、母亡き後、心情的に五個荘は遠い故郷となっている。斎藤茂吉は歌集『赤光』「死にたまふ母」で写真の時系列の中で、そこに居る母を直接的に詠んでいるが、塚本は過去の記憶を昇華しつつ、静謐にしかも遠い母を詠む。経歴の虚構と裏腹に、心中では故郷の近江を終生捨ててはいなかった、はずである。その母を思い、かつ望郷の念は、次の歌ににじみ出ている。

散文の文字や目に零る黒霞いつの日雨の近江に果てむ

（『されど遊星』一九七五年）

母に近はむ死後一萬の日を開し透きとほる夏の母にあはむ

（『不變律』一九八八年）

松しょう濤とう

松井淑子

渋谷区の松濤に引っ越した。

松濤に引っ越した、と言うと、何人かの人から、「ずいぶん高級な土地に越しましたね」と言われた。なんでも松濤は、有名人やハイ・クラスの人々が多く住んでいる名高いお屋敷町なのだそうである。

「女優の山本富士子さんの家がありますよ」

と、地図まで教えてくれた人もいた。

そういえば、先日、家電の量販店で買い物をして配送を依頼したとき、住所を告げると、店員の応対が心なし丁寧になった。

松濤は、渋谷の東急百貨店本店の裏から山手通りにかけて広がる町である。歩いてみると、なるほど立派な邸宅が多い。いずれも背の高い石塀などで囲まれ、門扉はきっちり閉ざされて、中の様子は一切わからず、物音もしない。町全体が静かで、人通りもごくまれである。

物の本によると、この土地は江戸時代、徳川御三家の一つ、紀州徳川家のものだったそう、それを、明治になって佐賀鍋島藩が譲り受け、維新によって禄を失った藩士たちの生活を支えるため茶畑にして、「松濤園」と名付けたとのこと。ここで採れたお茶は「松濤茶」と呼ばれ、市場に出回り好評だったが、やがて静岡茶などの競争に敗れたため茶畑は廃園にされ、跡地は住宅地として貸し出されることになったという。

そのときこの土地に家を建てたのが政府高官や成功した実業家など豊かな階層の人たちだったそうで、その名残が今日まで続いているのだそうである。

この前の昼過ぎ、玄関のブザーが鳴ったのでドアを開けると、「お手洗いを貸して」と友だちが駆けこんできた。渋谷から自宅まで運動を兼ねて歩いて帰ってきたが、松濤に差し掛かったところでお手洗いを我慢できなくなった。そこでコンビニでもあれば借りようと思って探したが一軒もない。困り果てて、私のところに駆けこんだのだと言う。

「今の時代にコンビニすらないので、この町は、あなたが留守だったら、どうなったことやら」

と憤慨の態である。笑ってしまった。

だが笑いごとではない。この町から最寄りの駅まで私の足で約二十分、バス停まで十五分、まともなスーパーまでは片道三十分はかかる。スーパーに買い物にいけば、往復一時間、距離にして約一里は歩くことになる。今は元気だから歩けるが、足が弱ったら、買い物難民になりかねない。

高級住宅地かもしれないが、この町を、私はひそかに「東京のチベット」と呼んでいる。

ことば

加藤文字子

——花は根に帰り 真味は土にとどまる——。小さな紙片に走り書きしたのを、机上の蝶のついたメモスタンドに留めている。

以前、ある僧侶から教わったことばだ。

いつの間にか紙は黄ばみ、和室の風景の一部のようになっていく。

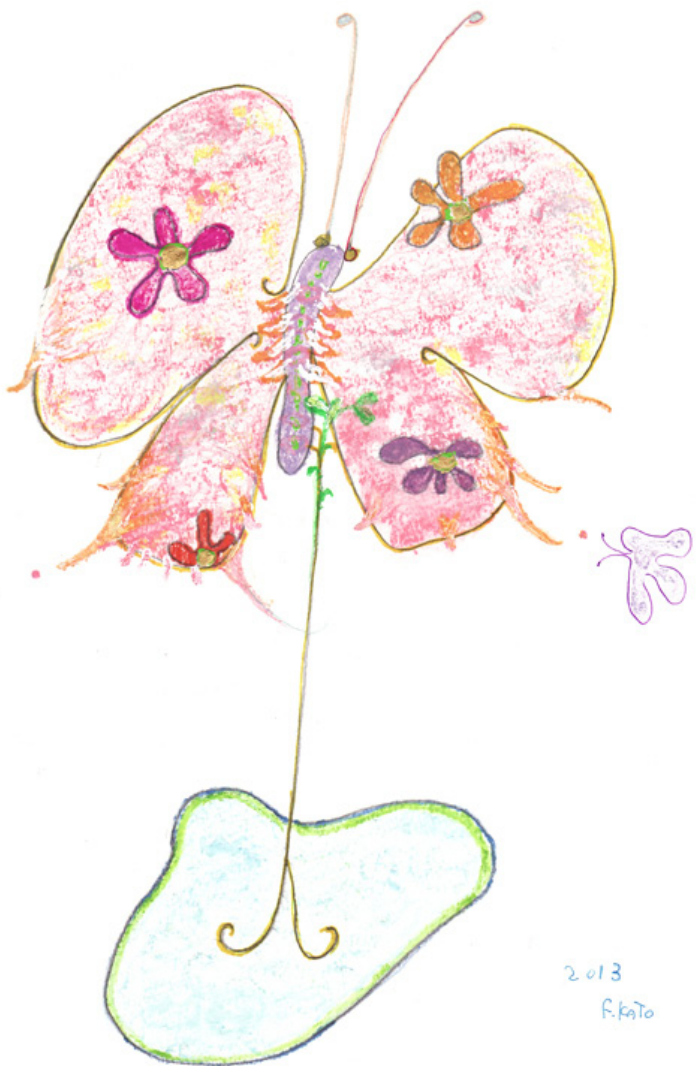
色えんぴつの束やスケッチ用の筆、それから家族の小さな写真など、いろいろが混在する中にポツンという。

普段は特別気に留めるわけでもないのに、書きものでもしようとすわっていると、ふとした瞬間そのことばが風景からぬけ出して、頭の中をめぐりはじめる。時々そんなことになる。

そうなるたびに、なぜかことばのことを考えたくなるのだ。

どうということなのか、本当は何なのか、何度も心に通してみても、結局わかるようではわからない。

しばしの逗留ののち、ことばはいつもの風景に帰って行く。



そのわかるようでもわからない感触や反芻しているひと時が、良いのかもしれない。もしや、もしや……と、思いをめぐらす。毎回わずかながら違う受け取り方をしているような気もする。私も変化しているということであろうか。

わかるためではなく、私の成長を見守ろうとするエッセンスが隠されたことば、そう捉えてみることにしようか。

忘れた頃に近づいてきたり、離れてみたり、だけど決して忘れない。オカシナ関係だ。

対詠 ごきげんいかが？ PART 46

O N M
丸山 弘子
布宮 慈子
小野澤 繁雄

春告げる沈丁花の香みちのくへ届くがごとし盛りときけば	3月20日	N
このぐらいというほどの街朝の間を人にあわずに二町内歩む	4月4日	O
ひと老いていかなごの釘煮届かざりことしの新物デパートに買ふ	4月8日	M
月山を望むスタジアムにひと数多集 <small>あまた</small> へりガンバ大阪戦に	4月14日	N
生着があやぶまれいし枝垂れざくらことしの花のながく散りつつ	4月15日	O
糖尿病予備軍と吾に言ひながらコーヒーに砂糖三粒も入るる	4月22日	M
チューリップ水仙さくら梅と桃、菜の花揺るる山形の春	5月1日	N
彫刻通りにも確か春はきて今日の日は光太郎を水仙かこむ	5月2日	O
羽化したる春の青筋揚羽 <small>あをすぢ</small> 小型にて庭の花の上にしばらくを居り	5月12日	M
ブルーベリーの白き小花の蜜吸ふはマルハナバチか大きその体	5月19日	N
幼子の背丈がほどの馬頭尊に供えられたるナデシコのはな	5月21日	O
やうやくに夏日つづきて瓶の水温しよメダカの孵化がはじまる	5月26日	M
夏の気温つづけば畑の乾燥と蒔きたる種を思ふ夕暮れ	5月29日	N
倒れているバスケポストを埋めのこし草のかたまり野薊 <small>のあざみ</small> 咲いて	6月1日	O
ひさびさの哲学堂公園川向ふの菖蒲田に絞りの紫の花	6月6日	M
大らかにジャーマンアイリス咲きてをり虹の花とふ別名をもち	6月9日	N
おのずから眼に入りてこしアイリスのそれら花々庭々にここに	6月10日	O
はやばやとソバナが咲けり撒きおきし古米に雀の親子来てゐる	6月14日	M

前号作品短評A 〈小野澤〉

●拍手に笹子立たせてしまひけり

岩田都女

笹の子は筍のことらしい。かしわ手を打つという。句は、神社で鳴らされたその音で、思いがけず笹子を立たせてしまったよ、というようなこと。立たせて、は、笹子の、子からムリがない。かしわ手の音のひろがりとともに下方に広がる視線、といったようなことも感じられた。タイトルは「春を待つ」、その四句目になる。前句は「寛永寺の鐘を聞きつつ冬牡丹」で、寛永寺は神社ではないが神社仏閣、ここにも響きあうものがある。季語で、冬に花名が続くもので五音のものには冬薔薇、冬菫などがあるが少ない。冬の、となるともう少し多いか。

針供養孫の世代に文を書き

針供養は、関東では二月八日。あわせて裁縫の上達を祈ったと歳時記にある。孫の世代に、と敷衍したところにふくらみが生じた。

●築一年ゲートブリッジより見るかす東京スカイライン清しも

河村郁子

スカイラインⅡ地平線、とあって、山・建物などが空に接する輪郭線（新明解五版）。ゲートブリッジは、ゆりかもめの車内からと日本科学未来館の七階からみたことがある。ゲートブリッジもできてから一年が経過したことも驚きで、築一年、と簡潔だ。

東京観光と題された一連の真ん中の歌。一首目「あまりにも変化ゆゆしき東京に従ってゆけずに観光バス行」から、作者は観光バスの旅を試みたらしい。一体にお台場からみると、東京が水平にひろがったさまをそれこそ一望することができる。その景観は今までしかなかったものだ。新鮮なものだ。作者が清しもと云っているところ。

行程には、歌から、恵比寿ガーデンプレイス、品川プリンスホテル（最上階）、ゲートブリッジ、東京駅舎、丸の内（ビジネス街）、東京タワー（展望台）、ミッドタウンなどが含まれたようだ。

●鳥海山を月光川より望むとき豊かなる気があたりを包む

布宮慈子

高さからいうと、鳥海山は東北第二の山らしい。月光川は七首目の、遊佐町を貫流する川で本支流はサケ漁が盛ん、と図書館の本にあった。大きな景観がその空気感まで伴うようにして詠われた。山と川、固有名詞も魅力的だ。遊佐町の歌は、次の通り。

遊佐町は湧き水の町 うまき米うまき魚あり恵みに満ちて

結句は、整理したいいかただが、恵みというコトバには新しいニュアンスが置かれたようだった。挨拶の歌でもある。

腸を晒すがごとし鳥海南麓吉出山の採石現場

前号作品短評B 〈慈子〉

●蛇口にじかに水のむ少年に校庭は広し日のさすままに

小野澤繁雄

寺山修司の命日に合わせて短歌雑誌が特集を組んでいたせいか、掲出歌に寺山の少年の歌を思った。「列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし」「日あたりて遠く蟬とる少年が駆けおりわれは何を忘れし」（「初期歌篇」）、「わけもなく海を厭いとえる少年と実験室にいるをさびしむ」（『空には本』）。寺山の「列車にて遠く見ている……」は学校の教科書に載ったようだが、二句切れに読めばなんとか読めるものの、六年生や中学二年生には主体のとらえ方が難しいのではないだろうか。

「蛇口にじかに水のむ少年に……」は、難しくはない。だれもが日の照る校庭の端にある水飲み場で水を飲んでいる少年を思い浮かべるだろう。校庭の広さと時間が止まったような光景を見ている作者の位置関係は揺るがない。ただ、「蛇口に」は字足らずであり、助詞「に」が繰り返し使われるので「校庭は広し」までを一気に読むことが要求される。さらに結句は「に」で終わっていて、「に」へのこだわりが強いちよつと変わった歌である。

●結局はK電器店の言ふがままりビングの照明LEDに替ふ

丸山弘子

電器屋さんにはアドバイスされたとおり、今はやりの電球に替えたというシンプルな歌。が、「結局は」「言ふがまま」の表現から、いつも出入りしている電器屋さんと作者の関係が見えてくる。電気器具は量販店で買うこともできるが、多少高くついても馴染みの電器屋であれば、いざというときに助けてくれる。電器屋さんも客とのあうんの呼吸を心得ているのだろう。次の歌にある「人感電球」は人感センサー付き電球のことらしい。この言い方を初めて知った。夜道を通るときに急に点灯して驚き、これなら泥棒よけには持つてこいと思っていたが、家の中でも使えるものなのだ。

「交差点を渡りたくなき犬頑として動かず 主人が支配されゐる」は、おもしろい場面に遭遇してできた歌。かなりの破調である。結句のはずし方は、いろいろあるかもしれない。

●群れのなかの空しさよりは群れぬことの不安に耐へなむ春の淡雪

結城 文

六七六の音数で空しさや不安を導きながら、「春の淡雪」という結句でびたりと収まった。群れることは、だれもが同じような気持ちをもったことがあるのではないだろうか。が、あらためて歌として表現できるのは、おのれの足で立っている作者の強さであろう。群れずに、意識は自分の内面に向かっていく。「ほのぐらきわれの意識の源流をたづねむ双眸に藍を満たして」「ゆづることにつしか慣れぬたわみつつゆく川のごとく海へ向かはな」と、多少の迷いがあっても大きなものへ向かっていこうとする作者の精神は研ぎ澄まされていく。一連では、雪の色や川・海の色が効果的に使われている。

私の三月三日

市川茂子

昨年の七月二日に、頼りにしていた叔母が亡くなった。

三月三日が叔母の誕生日だったので、ひな祭りのご馳走を作っては、年中行事のように私を呼んでくれた。

誕生日と桃の節句を一緒にお祝いできて、二度手間がはぶけると言っては、ビールを呑みながら田舎のことや、村の人たちの消息などをなつかしく思い出しては、昔話に花を咲かせたものである。

十年前に亡くなった叔父は私の父の弟で、叔母は母の妹なので、上京して以来わが家のように出入りしていた。叔父の仕事の関係で神奈川県に住んでいたが、終戦後まもなく東京の赤羽に新居を構えてから、身内の者はもちろん親しい村の人たちも、東京見物などで上京するときはまず叔母の所に立ち寄ってから、それぞれの目的地に出かけて行ったようである。

その後も年月を経て、私も、いとこや親戚の人たちも、就職や結婚などで東京近郊に住むようになってからも、休日には誰かしらが遊びに来ているので、その親たちはお米や農作物の野菜や山菜などを持って来たり送ってくれたりして、いつも田舎料理を作ってご飯を食べさせてくれるので、淋しい思いをせずに赤羽は東京の関所のような感じで賑やかだった。

いつも元気でみんなを親代わりのように世話をしてくれた叔母も、そして私たちも年を重ねるにつれて、昔のようには出かけられなくなってしまった。そして三年ほど前から叔母の体調が悪くなり、床につくようになった。ときどき電話がくるようになって、その都度すぐに見舞いに行くようにしていた。

誕生日や、ひな祭り、母の日などと名目を付けては、いま食べたいと言うものを持って行って、気弱になっている叔母のベッドに腰掛けながら、昔の話や、二人でお芝居に行つたこと、また森光子のでんぐり返しの最後を見られた、次に私が一人で行つたときからはバンザイだったといった話をしながら、テレビのお笑いなどで元気になってほしいと思いだしたが、叔母の心境はいかばかりだったかと考えさせられる。

二日が命日になってしまったので、もう一日寿命を延ばしてくれたらと、最後のわがままを言いながら、今年は叔母を偲んで遺影に桃の花を飾り、ちらし寿司を買ってきて、ひとりで静かに三月三日を過ごした。

巡礼の装束着けし柩の叔母その来し方を巡り逝きませ

私のふるさと

大石久美

十年前から、私の住処すまかになった江戸川区の地域は、昔は沼や海の埋立地で、辺りほとを流れる荒川も、以前開削した、もと荒川放水路で今は滔々と大きな流れになっている。

街は、高いマンションが立ち並び、それなりの清潔感はあるが、温もりが少ないように思われる。しかしそこに新しく住みはじめた人たちには、私は好感を持っている。特に親しい人がいるわけではないが、ある節度を持っている人たちである。

ふと、二三年前に文京区役所で求めた旧地名の地図を思い出して拵つむげてみた。

古い地図を眺めていると、今は消えてしまった古い町名が目につく。旧小石川区林町、隣町の丸山町・西丸町・駕籠町・原町など、ここには田も畠も無いが、紛れもなく、私が生まれ育ったわがふるさとである。目を瞑ると、戦後何回も行っているはずなのに、鮮明に眼に浮かぶのは、幼時から私の二十代までの町の様子、どんな細い小路までも意識の中にはつきりと覚えている。そこに住んでいた小母さんたちの癩症かんしやうにまで磨き込んだ羽目板や敷居など、その拭き掃除する小母さんたちの背中までが浮かび上がってくる。多分、維新までは、微禄の旗本や御家人の末が住んでいたのだろう。どの家も箱庭のような小さな庭、形ばかりの門と塀に囲まれていた。

大通りに二列に並んだ商家にも区分けがあり、地番は、一番から百番地までで一つの町内がまとめられていた。その外れにある大きな屋敷は、水戸の徳川家の江戸屋敷であった。何番地に住むというと、その人の階層が臍へらげに解るのだが、それを口にすることはあまり無かった。ただ四番地よんばんちは低所得の人たちが住んでいたのだろう。井戸は共同であったし、どの家も四畳半一部屋と土間のある家が並んでいた。夏になると、手拭を繋ぎ合わせた単衣ひとえを着た小父さんたちが床几しようぎに腰掛けて涼んでいた風景も思い出す。

この四番地に同級生がいたのだが、彼女はがんばりやで、市立の女学校に進んだ。昭和十五年の小学校を卒業した同級生五十名の進路は、府立・市立を含む女学校進学が十六名、高等小学（二年）二十八名、小学校のみで学業を了おえた者六名だった。これは多分、都内での平均位だったと聞いている。

町で朝一番に店を開けるのは豆腐屋に煮豆腐屋さん。煮豆腐のおかみさんは、丸鬚まるまげに結つてにこやかに客に接していた。もうもうと湯気の上るお店に行くのは、笹ささを持った子供たちの役目だった。

戦後になり、私のふるすとは崩壊してしまった。父母も弟もこの世にはいない。町を歩いても殆ど知っている人はいないだろう。

だが思い出の中に大事にしているふるすとは、昭和時代に住んでいた文京区の林町である。

義兄の死

丸山弘子

肺癌を告知されていた義兄が亡くなった。平成二十四年十二月十一日のことである。八十四歳であった。

義兄が八十歳の誕生日に電話で話をした。

「こんなに長く生きるとは思わなかった。八十歳ですよ。もういいのにねえ」

そう言っていたので、本人としては充分の命だったと思う。しかしそのとき私は、「何を言ってるんですか、まだまだ」と言ったことを覚えている。

本人に肺癌の告知をしたとき医者は、

「手術はせずに薬で様子を見ることにしましょう。年齢のこともあるし」と言ったそうだ。

無理のできない体になってしまったが、定期的に検査を受け、薬が体に合ったのか、義兄はごく普通に過ごしていた。しかし日がたつにつれて、体力の衰えは仕方のないことで、横になっていることが多くなったらしい。それに、特に夏の暑い日などは食欲が落ちたという。「それがいちばん恐いのよ」と、姉は言っていた。

長い間、来なくていいと本人が言うので、見舞いもままならなかったが、亡くなる一週間ほど前、「来てもいいよ」と言っているからと姉から連絡があり、急遽会いに行った。

苦しいのか、義兄はベッドに横になったままだった。私が顔をみせると、「Oちゃん、キレイになったねえ」など、ふざけたことを言って笑わせた。来てよかった、と思った。

それから二日ののちの命だったが、その日息子が会社から帰るのを待って入院したという。苦しくても自分から入院する、となかなか言わない人だったから、余程苦しかったにちがいない。そしてそのとき、義兄は覚悟をしたのかもしれない。

手当てを受け一晩ゆっくり眠り、次の日の夜、家族に看とられて亡くなった、と甥が伝えてきた。勿論薬のせいだが、苦しまず穏やかな死でホッとした、とも言っていた。

葬儀は家族葬だった。最近多いと聞いているが、私ははじめての経験だ。出席者は身内だけだから人数は少ない。行くことは今までの葬儀と同じだが、ざわめきが少なくてよかった。

最後は、祭壇に飾られてあった全ての花をお棺の中に。義兄は花で埋まった。

「清紫会」だより

◆第104回 平成二十五年二月二十一日(木)、会場・文京シビックセンターA会議室

〈提出作品〉大石久美・私のふるさと／河村郁子・東京駅と父／林博子・雪の日／松井淑子・木の花

◆第105回 三月二十一日(木)、会場・文京シビックセンターA会議室

〈提出作品〉池田桂一・老いるとは／市川茂子・私の三月三日／大石久美・探し物は／小野澤繁雄・金魚／河村郁子・東京駅と父(続)／松井淑子・松濤／丸山弘子・義兄の死

◆第106回 四月十八日(木)、会場・文京シビックセンターB会議室

〈提出作品〉池田桂一・早起目覚めは／大石久美・六義園／林博子・跳んだ／松井淑子・物忘れ

(松井)

無二の会短信

◆わが家の庭には、花の咲く樹木は少なく、梅、椿とツツジだけである。あとは松や檜などの常緑樹が多い。だから五月に入ると、落葉が始まり、玄關から門までの二十五メートルほどの石畳には、細かな樅や手のひらほどのビワなどの枯葉が、毎日のように落下する。そしてそれを掃く日課が当分続くことになる。

それがここ数日は風が強く吹くせいか、落下が多くなった。紅葉は秋で、落葉が夏にもあるなどは、幼い頃には全く気付いてはいなかった。夏落葉として、短歌に詠むようになってからである。自然は何ひとつ変わることもなく繰り返していたのに、まだまだ気付かないことがあり、見逃していることもあるのかもしれない。

池田桂一

◆留守電に声を吹き込んで、その返事でようやく声がきけて、連休後半にもどってきた下の子の顔をみることができた。新潟にボード遊びにゆくといい、正月に出ていったきり、その新潟が予報では吹雪、そのまま四カ月が経っていた。その間、メールに返信もなし、顔をみせることもしないという状態だった。日に焼けて、髪の毛もずいぶん伸びた子が姿をみせたのにはホッとした。さっそく床屋にいったら、次回は半年後かもしれない。

小野澤繁雄

◆今年はお観桜の機会を逸してしまった。桜の開花が例年より早かったり、寒暖交々の天候が続き、外出が億劫になっていたりとも思われる。旧友たちと有楽町界隈で会食し、日比谷公園―法務省前―桜田門へ桜狩と洒落込むコースも今年は友の体調を気遣って控えていた。私自身も、風邪とも花粉症ともつかない症状に罹っていた。同期会が終わってから、満開の時期かと望みながら「私の山ざくら」を訪ねた。すっかり若葉に覆われて、幹から咲き出た花が残っているだけだった。「田中山憩いの森」の雑木木にもそれぞれの若葉が出揃っていた。

河村郁子

◆息子の就活に今日の学生の過酷さをみている。エントリーシートから始まり、会社説明会、適性検査や筆記試験、一次面接から最終面接で内定を得るまで三カ月ほどかかる勘定だ。数十社受けて、藁をもつかむ思いで残った会社に希望をつなぐ。今、アルバイトの若者は増え、非正規社員も会社で三割を超えているとか。親の世代は、もつとノンビリと学生生活を送っていたことを考えると気の毒でならない。せめて、働く前に心身をすり減らさないことを祈りたい。新関伸也

◆はじめまして。短大のテニス部で、慈子さんが一年生、私が二年生でした。昨年十月、同じ「ふえみん」読者ということで三十八年ぶりに山形で再会しました。このえにし、嬉しく思います。俳句七年目になります。どうぞよろしく。

新野祐子

◆久し振りに墨堤ぼくでいに行った。桜の時期は過ぎたが、目的は花よりダンゴ、長命寺の桜餅である。この店は売り切れだったり休みだったりで三度に二度はフラれるが、今度は首尾よく入れた。この店の三枚の葉に包まれた桜餅もおいしいが、桜餅しか置いていない潔さが好きである。

松井淑子

◆ことしは桜の開花が早かった。わが中野通りは街路樹の桜が見事で、毎年のお花見は近場で満足している。しかしことしは、たまたま円空展に行った日が、開花宣言直後の土曜日だったので、上野の花も観ることになった。ただ花は見事であったが、人の多さも見事でこれには辟易した。サンマは目黒にかぎる、ではないけれど、私にとって花見は、近場の中野通りにかぎる、を実感した。

丸山弘子

◆急に日が長くなってきた。七時をまわっても明るく、外で遊ぶ子どもたちの声がいつまでも聞こえる。モンゴルは夏になると夜九時すぎでも白々と明るい。本格的な夏の到来を待たずに、私はハルとふたり帰国する予定だ。行き先は北海道。モンゴルに敗れ、破局した私に、北海道はどんな表情を見せてくれるだろうか。今は、残り少ないモンゴルの日々を楽しんでいる。

山内ゆう子

編集後記

◆東京に行ったときは「ビッグイシュー日本版」という雑誌を買うことにしている。駅から少し離れた路上で、雑誌を片手にかざしている人から買う。立っているのは、たいていおじさん。ホームレスだ。静かに売っている。最初は二百円だった。しばらくして値上げせざるをえなくなったのか、三百円になった。売上が減るのではないかと買う側も心配したが、そのころから雑誌の存在を知る人が多くなり、そう減収にもならなかったようだ。三百円のうち百六十円が販売者の収入になるシステムだという。たとえお金を寄付しても、どのように使われるかわからない仕組みから比べれば、直接的でなんと小気味いいことか。考えた人は、ほんとにエライ！ ホームレスのおじさんたちは目標をもち、売る場所を研究している。三百円を手渡すとき、その先につながる感じがする。

あるとき友人に会ったら、自分で買う前に「ビッグイシュー」をくれた。いい記事があったから読んでねと。薄いわりに企画もインタビューの人選も、なかなかなのだ。三百円出して買う人は、よい読者でもあるようだ。山形にもホームレスはいるが、「ビッグイシュー」販売者はまだいない。

魚住昭さんのウェブマガジン「わき道をゆく」に「ビッグイシューのある街角」が載っていた。

<http://gendaiismedia.jp/articles/-/34813>

◆「茂吉秀歌『赤光』百首」（塚本邦雄、講談社学術文庫、一九九三）を少しずつ読んでいます。茂吉秀歌シリーズ五冊のうちの第一冊目。塚本は、あふれるような知識をもって解釈しているわけで、たいへんに素晴らしい。今までは本棚にあっても、なにか圧倒される気配で、まったく手をつけることができなかった。読んでいくと、文庫化する際の編集者としての布宮みつこの気迫までもが伝わってくるようだ。若いころ茂吉の弟子である結城哀草果に師事したみつこは、塚本の「茂吉秀歌」シリーズに仕事とはいえ、特別な思いでかわつただろうと想像する。

叔母である布宮みつこは晩年、ふるさと山形に心を寄せていた。ついには山形に引越すことまで考えていたらしい。さまざまな理由からその計画は実現しなかった。が、思ってもいなかった自分がふるさとへ戻り、こうして暮らしていると、叔母と一緒に山形を見ているのではないかという気がしてくる。

今回、新関伸也さんがエッセイで取り上げた『塚本邦雄の青春』は偶然の一致であった。

◆今号から新野祐子さんが俳句作品を出してくれることになった。新野さんは、三十年前に企業の図書室勤務を辞め、ふるさと白鷹町に戻って百姓になろうとゼロから農業を学んだ人だ。朝日連峰・葉山の大規模林道の計画を「葉山の自然を守る会」の事務局長として中止に追い込んだことでも知られている。最近では、白鷹町で設立された「しらかか地域再生ネットワーク」の理事としての活躍が期待される。骨のある人との再会は、山形で生活するなかでも励みとなっている。

（布宮慈子）

季刊 展景 70号

二〇一三年六月十六日発行

編集・発行人 布宮慈子

オンライン版制作 堀 哲郎

無二の会・展景発行所
山形市上町二一―一七―二〇二
muninokai.com